



「日文研」 山の手倶楽部 青井 勇氏

文化 ■ 彩華映発

文化

風土と活動



桂坂は、「緑豊かな自然」といわれるほかに、国際日本文化研究センター（「日文研」）という学術研究機関があり、近くには京都市立芸術大学・音楽高校もあって、文化的環境に恵まれています。このことが近隣の羨望の的となり、さらには記念事業の一環として実施された「ふれあい会」や「合同作品展」など華やかなイベントの展開が、新聞で報道されたこともあって、「桂坂」の評価を高めたようです。たしかに私たちは、この恵まれた文化的風土の中で桂坂ならではの恩恵を色々としています。

「日文研」と学術講演会・一般公開

桂坂の中央に位置する「日文研」は、どこからでも歩いて15分足らずの距離にあり、文化の芳醇な香りに酔えるのですから、私たちこの地に住むものは恵まれているといえましょう。

年に1回の一般公開では、施設の一部、所蔵の文献や蓄積されている研究データなど、親しく拝見できます。

ある年の一般公開について記す感想です。

「日文研」の一般公開——羨ましい「遊び」の空間

去る11月1日、国際日本文化研究センターが私たち一般人に公開されました。

日本文化に関する「国際的・学際的な総合研究」と「世界の日本研究者に対する研究協力」をおこなうことを目的として設立されたため、その利用も関係分野の研究者に限

られ、普段は一般に公開されません。

しかし、今回のように年1回にしろ、「一般市民への普及」活動の一環として施設の一部、所蔵の文献、これまでに蓄積されているデータなどが、見たり触れたりできる形で公開されるのは、地域に住む私たちにとっては、文化の芳香を聞きうる恰好の機会にもなり有難いことだと思います。

当日は、セミナー室では「日文研紹介ビデオ」の放映と写真「秋の大原野」の展示、図書室では外国語で書かれた日本研究書の陳列と「データベース」の公開などがありました。

「桂坂、いいところにお住いですね」と羨望されるこの地の、しかも眺望の利く一等地に位置するセンターは、この環境が設計に巧みに活かされています。

円筒型の図書室や講堂もさることながら、回廊に囲まれた中庭を含む建物全体の佇まい、これには魂消ました。あの和洋を折衷した？回廊に囲まれた「遊び」の空間では、自在に心を遊ばせることもできそうですし、また、国際的と日本的との相互交流に雄々しく想い遣えることもできるでしょうから、研究者冥利に尽きるのではないかと傍目には感じました。

中西進教授の講演「あそぶを考える」を聞いた後、累々たる屍ならぬ、大枝山に投棄されたゴミ・廃材を横目に帰路に着きました。しばしの間とはいえ、憧れ出てあの「遊び」の空間に逍遥していた魂も、わずかの道のりの中でいとも自然に、現実の我が身にもどっておりました。

『桂坂』16号1994.11.10

この一般公開の日や学術講演会では、センターの著名な先生の警咳に接することができます。また、テーマによってその都度、適任の講師が招かれます。ある時の公開セミナーでは、隣の市立芸術大学と提携して「唱歌にうたう日本の四季」がとりあげられ、私たちは、「日本の四季」の趣を味わうことができました。



「日文研」ホールの外で

時には、「日本研究・京都会議」という国際会議の開幕を告げる公開講演なども行われます。1994（平成6）年10月17日、ノーベル文学賞を受賞したばかりの大江健三郎氏が最初の講演「世界文学は日本文学たりうるか」を行ったのは、実はこの公開講演においてでした。当日は、マスコミ各社が大江氏を追って桂坂に大挙して集結しましたが、

私たちも思いがけない幸運に出くわしたことになります。

カザラッカコンサート

桂坂小学校PTAの主催する恒例の「カザラッカコンサート」もやはり桂坂という「地の利」を活かしたころみで、音楽高校のフルメンバーのオーケストラを招いて行われる音楽会として好評を博しています。



ふれあい会館の教養講座と「花の木ラウンジ」

ふれあい会館では、多彩な教養講座が開かれ、これも全市的に受講者の募集が行われます。「健康づくり」「介護講座」にとどまらず、陶芸、茶道、水墨画、囲碁などの文化講座も開講され、作品発表の機会も設けられています。

また、「野鳥園」には「花の木ラウンジ」があります。ここは地域の文化サークルが作品を発表する場となっており、土曜・日曜が開園日。催し物は、例えば、4月は写真展、5月は野鳥写真展のように1ヶ月ごとに変わります。



ふれあい会館
ロビー



「野鳥園」花の木ラウンジ

桂坂の放送網

難視聴地域の洛西ニュータウンと同じく桂坂でも、開発時から有線放送のシステムになっています。衛星放送やCS放送なども視聴できますが、この拡張放送は桂坂CATV専用のコンバーターが必要です。

社屋を新しくした「JIB」(Jack in the Boxの略で、〈びっくり箱〉の意)では今後、新しい放送サービスとして、9chと11chの空きチャンネルで「JIBコミュニティ放送」(視聴無料)を予定しています。自治連合会や自治会のお知らせ、他地域のコミュニティ放送便りや各種情報のサービスです。例えば静止画面やVTRで、センター街の買物情報などがリアルタイムで流れることになります。

しかしこの「JIB」の放送網は、(株)西電工と長谷工の区域だけに張られたもので、さくら自治会などは洛西ケーブルビジョン(「RCV」)のネットに入っていますから、桂坂には2系統の放送網があるわけです。

桂坂の緊急放送ならびに案内放送は、「JIB」を通じて行われますから、さくら自治会など京都市住宅供給公社と住宅・都市整備公団の開発地域には伝わりません。長谷工の施工した2つのマンションも保安設備が異なるため、はなみずきとぼぶらの両自治会も今は聴取不能です。



文化普及会と「名月観賞の夕べ」

各種団体の1つに、「文化普及会」があります。主として西京区が行うイベントの世話役で、壱原廃寺跡で毎年、各学区が競演する「名月観賞の夕べ」や京都市の大きなイベント「京都まつり」の西京区を担当します。もちろん桂坂学区の「文化普及」にも関わります。

「名月観賞の夕べ」は、西京区民ふれあい実行委員会および西京区民文化普及会が主催するもので、名月を觀賞しながら各学区の人たちの歌や踊りを一緒に楽しもうという恒例の西京区民のつどいです。会場にはお茶席やうどん・おでん・飲み物などの模擬店も設けられ、区民のつどいを盛り上げる一役を担います。

舞台の歌や踊りを見て、ある年の文化普及委員・中谷敏

清氏は、広報『桂坂』(34号1996.9.28)で、「西京地区には多くの日本の郷土の歴史や遺跡があり、文化の漂う地区だけに、当日は、各区民の生活を営みながら伝統芸能を保存して芸能文化を継承されて大切に育てられる方々の姿に感動いたしました」と、その感想を述べられています。

桂坂学区の代表としては、1993年にあかしあ自治会の沢岡雅楽満社中の皆さんが箏曲の合奏で参加されたのが最初で、翌年は女性会を代表してさつき自治会の宇野早苗さんが詩吟『本能寺』を披露されました。その後も毎年、山の手倶楽部のみなさんの女性コーラス(1995・1997・1998年の参加)、けやき自治会の矢本知里さん・雨田幸子さんのソプラノとハーブ演奏(1996年)、プランタンのみなさんの女性コーラス(1999年)が桂坂を代表して参加されています。

文化活動 — 親睦を深めるために

けやき自治会

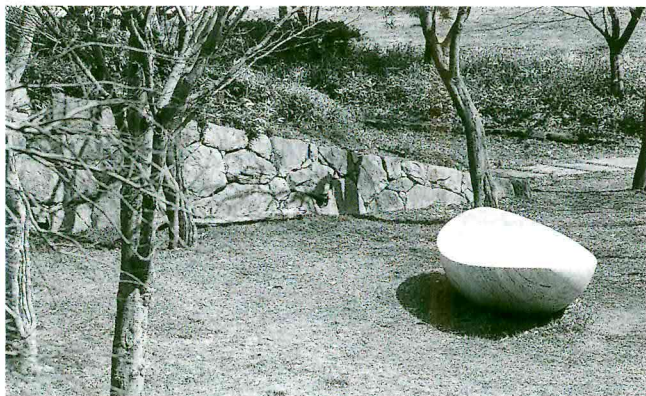
クリーンデーや柿狩りなどで会員相互の親睦を深めるけやき自治会は、1996年11月に「趣味の作品展」を開催しました。当時の井上照雄会長のことば(『桂坂』36号「けやき自治会・趣味の作品展を終えて」1996.11.25)に拠って開催の目的やその模様などを記してみます。

1つには「会員さんの趣味を知り、その趣味の中から会員サークルの育成を図れないか」、2つ目は「このサークルを、利用の少ない自治会館の有効利用に結びつけることができないか」ということでした。

文化・広報委員を中心にした出品勧誘が功を奏して、盛大な作品展が行われました。「中でも3歳の幼児や保育園児・小学生の力作が目をひきましたが、フランス刺繍や手彫りの額・押し花の額など5点の出品をしてくださった作者が、83歳のおばあちゃんと知った時は、驚きと同時に大きな感動を受けました」。

今後「このような取り組みが各自治会に波及し、将来連合体での開催となることを、大いに期待するもの」です。

こうした会員の幅広い交流を求める試みは、昨年秋の文化講演会にも受け継がれています。

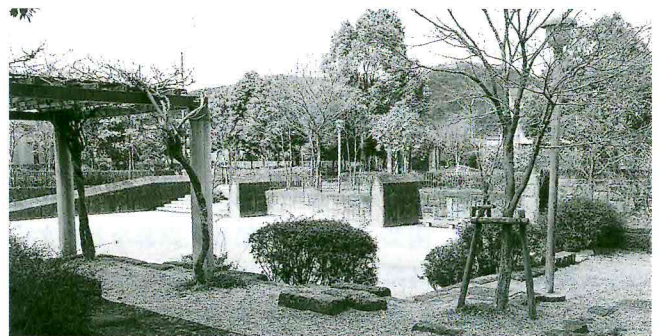


11月27日、自治会の会員である耳鼻科医の話聴く講演会。「スライドでは、耳の構造や各部分の名称・働き、そして耳の代表的な病気について」知り、また「ビデオでは病気で聴力を失った少女が器具を埋めこむことによって聴力を取り戻し、生き生きとしていく姿を見」て、「耳の大切さを改めて知り、とても勉強になった」とのことです。(『桂坂』67号「耳よりな話」1999.12.10)

さつき自治会

自治会の主催するこのような文化講演会は、さつき自治会でも企画され、実施されています。

自治会設立の頃から「文化普及」に熱心で、1998年の夏には「文化生活はアレルギー患者を増加させます」、その年の暮れには「夫婦の法律関係について」などと題する講演会が相次いで開かれています。いずれも自治会の会員である医師、弁護士といった専門の方による講演で、広報『桂坂』を通して案内された「公開講演会」でした。



かつてしらかば自治会においても、造園の専門家によるその時期に応じた「庭木講座」が7回にわたって行われたことがあります。

山の手倶楽部と地域女性会の文化活動

山の手倶楽部では、会員相互の連絡にニュースが発行され、会や分科会・同好会の動静などが伝えられます。

文化活動は、運動関係の分科会とともに活発です。「歴史史跡巡り」「旅行」「園芸」などは野外に活動場所を求め、「囲碁将棋」「謡曲」「写真」や「書道」はふれあい会館を、「一筆画」「コーラス」「手編み」の各分科会は中央信用金庫の2階を利用して研鑽を積んでいます。

その成果が作品として結実するものは「趣味の作品展」という公の場に出品され、女性コーラスの場合は「名月観賞の夕べ」や西京区老連の「文化芸能祭」に出演します。

地域女性会も、日頃の成果を「作品展」を開催して発表する一方で、サロンのような雰囲気の中で音楽会を開いて楽しんでいます。ふれあい会館を会場に、「ハーブサロンコンサート」や「春のコンサート」として木管による室内楽の演奏を鑑賞したり、また、「ティータイムコンサート」のくつろぎの中でシャンソンを聴いたりしています。広報でも案内された、一般も参加できる音楽会でした。

さながら桂坂の「文化祭」

この2団体は、記念事業の一環として桂坂では初めての「合同作品展」を開催しました。ふれあい会館の第1研修室と第2、第3研修室を使った、大がかりなものでした。これまで個々に開いていたものを一緒にするのですから、些か窮屈さは否めませんでした。力作で埋め尽くされ見応えがありました。

また、記念事業の「ふれあい会」には各自治会の達人たちが一同に集い日頃の修練の成果を披露、その演技・演奏は参会者を驚嘆させました。

体育関係の諸行事は、体育振興会の活動と努力が実を結んですでに学区に定着しています。そこでこの2つの文化的行事に結集された貴重な「協同」の力を見ると、こうした催しを恒常化させる、あるいは桂坂の「文化祭」を創出するだけの潜在力は私たちにはあるようです。2つのこころみをささやかな形ででも継続していけば、桂坂の発展、活性化につながっていくかも知れません。

自治会の広報活動

会の活動状況や連絡事項を会員に伝えるのに「広報」は極めて大切で、有効な手段です。

回覧板、広報紙、掲示板など伝達手段を通して自治会・自治連合会・各種団体の動きや主催行事、あるいは行政からのものを含めた連絡事項が伝えられます。受けとった私たちには、役員はじめ会員の皆さんの、会員相互の親睦を念頭において住環境の改善・整備に努力され、また、文化・体育活動に活躍される姿が分かってうれしいものです。

かえで自治会（『かえでニュース』）、しらかば自治会（『しらかば自治会だより』）、あかしあ自治会（『やまびこ』）などは発足当初から広報活動に意義を認めて情報の伝達に力を入れています。



広報の発行——にれのき自治会

1996年設立のにれのき自治会では、わずか3年半の間に1999年11月発行の『にれのきニュース』で、36号を数えます。自治会と建築協定に関する総会の報告はもちろん、自治会の企画行事、そして自治連合会や各種団体の動き——

例えば自治会館建設にともなう募金要請の記事、行政懇談会の報告、体育祭・体育行事の案内と結果の報告など盛り沢山の内容です。紙面では、「子どもたちを地域として育て、子どもたちをむすびつけるためのきっかけとなる活動の場」として『にれのきっこ広場』も設けられて和太鼓の練習や「秋の山を歩こう」といった子ども向けの催しを伝える号もあれば、「小学校ご入学おめでとう

ございます」といった春の門出を祝福する記事も掲載されています。

平成16年11月25日

にれのきニュース／第25号

〒617-0111 京都府京都市右京区桂坂
にれのき自治会
会 員 数 332 (1743)
副 会 長 河野 聡 (333-6291)
会 長 野村 孝 (331-5650)
総 務 課 長 田中 孝文 (331-8360)
会 務 課 長 二橋 京 (333-5198)

桂坂学区消防器具庫・自治会館建設費ご寄付について（城下）
にれのきニュース第24号（97.12.14）、「桂坂」第49号（98.1.1）、および「桂坂学区消防器具庫及び自治会館建設費のご寄付（自治会会報）」（98.1.17）でお知らせとお知らせを致しましたが、「建設費のご寄付」を各団体が集めに伺いますので、ご協力をよろしくお願い致します。

(1) 募金期間：2月1日（日）～2月22日（日）
(2) 寄付金：1日5万円（4千円単位）1日建設費はなくても可（任意）
寄付です。物議醸成はありませんが、住民の建設費は多額です。少くとも多くのご寄付をお願いいたします。

桂坂学区の自治会館は誰が使う？
町内会役員に選ばれた方がそれぞれ自治連合会、体育振興会、少年体育委員会などに建設費の一部が使われて利用されます。際々、青年少年に任せられる中、ご協力が必ず必要になります。
建設費が、桂坂の良いところを建設費に、町内会の建設費にのみ使われません。建設費は、ほかのボランティアの活動に活用されていますが、建設費は少額です。
桂坂学区の自治会館をやるべき理由？
各自治会の自治会館を持ち回りで利用してはいますが、指どの方が必要で実現されるため「迷惑駐車」の形で付随住民の方に迷惑をかけてきました。なお、あかしあ自治会にはコピー機や印刷機を揃えて置くなどの迷惑をおかしています。また、大人数の会議はふれあい会館を利用してはきましたが、京都府の施設ですのでも自給自足の施設であり、利用しづらい施設です。
小学校の場所に自治会館を建設することで、以上のことが解決されます。
なぜ寄付金を求めるの？
京都府、消防からもらえるのは「補助金」です。つまり住民が費用を分担するのが基本です。どの程度の規模と設備のものに建設されるかは住民の負担から集まるお金の数です。なお、負担が高くなるのは「震災」を想定しているためです。
【なぜやるの？】
10周年記念事業の一環であることとアピールすることで、自治会館建設の補助金は最高額の800万円の枠が得られます。また、同時に消防器具庫を建設することで小学校校地の利用が可能になり、かつ補助金最高額の400万円の枠を占めています。つまり、「今年であること」で補助金が最大限得られ、かつ、効率的に消防器具庫と自治会館の建設が可能になるということです。

回覧板・広報紙・掲示板

回覧板は、緊急の連絡事項の伝達には無くてはならない手段ですが、次のお宅へ送ることが急がれて家族全員の目に触れるとは限りません。こうした不備・弱点多、各戸配布の広報紙であれば、手元に「留め」ることも保管しておくこともでき、にれのき自治会の活動の足どりを後になって知りたい場合でも足跡を辿ることができるわけです。

広報板は、バス停に設置されたものと、京都市が設置したものとがあります。前者は、自治連合会が業者懇談会において設置を求めたもので、掲示物の更新、貼り替えは最寄りの自治会が担当しています。



もみのき自治会館のOA化——もみのき自治会

従来の伝達手段のほかに、もみのき自治会では、情報化時代に即応した「広報」活動のあり方として、「会員間の新しいコミュニティの場を創出」することを目的にホームページ(<http://www.geocities.co.jp/HeartLand/6217/>)を開いています。

自治会館にパソコンとFAXを導入したのは、事務の効率化を図って役員の負担を軽減化するとともに情報を迅速に伝達できる、そしてネット上で自由闊達な意見の交換も可能であり、より開かれた自治会が期待できる、という考えからです。

情報化社会の到来が喧伝される昨今とはいえ、まだどの家庭にもパソコンがあるわけではありません。そこで、パソコンのある場合にはE-mailを通して、また、FAXのあるお宅はFAXで、その他の家庭には従来どおり回覧板を回して情報を提供しようというもので、今後の地域のコミュニティのあり方を示す一つのところみです。

自治連合会の広報

1990年12月10日に創刊号『桂坂自治連合だより』が発行されてから1999年12月発行の「記念特集号(II)」まで、67号になります。(これまで発行した広報は、合綴して各自治会館のほか郵便局、京都中央信用金庫、ふれあい会館など公共施設のロビーに置いてあります)



創刊号から4号まではA4判。草創期の桂坂の出来事、催しなど精神の昂ぶりの中で要領よく編集されています。5号はB4判の2枚綴り。6号は「桂坂」を冠したものの最初で、A4判の両面刷りでした。

今の『桂坂』になったのは7号からで、概ねB4判で両面刷り。山田まゆみ元編集委員の回想(『桂坂』50号)にあるように、「それまで不定期であったものを、少しでも新しい情報を伝えたいと、概ね月1回の発行に」し、当時は「4人で担当を決め、それぞれが企画から取材、原稿依

頼、時には自らも原稿を書き、それを集めて(入力)、紙面の割付け、印刷、(各自治会長宅への)配布までしていました」。1996年からは、見るに見かねた自治連合会の配慮で、各自治会より選出された委員が月に3回程度集まって編集会議を開き、広報を発行し、今日に至っています。

広報編集の考え方

発行がもし年4回程度の「季刊」であれば、どの号もご挨拶風の文章や報告記事が並び、「一人でも多くの方に読んでもらえる紙面」から遠く隔たってしまいそうです。回数が多くなればそれだけ、報告以外に桂坂学区全体の動きや自治連合会・各自治会・各種団体の消息・案内などを伝えることができ、さらに各施設の行事を事前に案内すれば皆さんの「予定表」の中に書き留めてもいただけます。

しかし月に数回の会合となると編集に携わるスタッフの負担が増すのは当然で、選出段階で既に「編集部は鬼門」説が浮上し、敬して遠ざける風も吹き始めるようです。むつかしいところです。

しかし、桂坂は目に見えて発展している街であり、各団体や施設の動きも盛んになってきたこともあって、最近に掲載すべき原稿が数多く集まり、編集部は紙面の割付けにうれしい悲鳴をあげる有様です。こうした中で、いくらかでもこの「敬遠」の気を祓うには、「一人でも多くの方に読んでもらえる紙面」づくりをモットーに企画記事を予定し、編集委員が桂坂全体を股にかけて取材し、記事にまとめて紙面に割付けるといふ、編集の「醍醐味」が味わえるよう配慮する、そうすれば祓除の霊驗あらたかなものがあるかも知れません。

桂坂自治会館 — 文化活動の拠点

ところで桂坂には、私たちの文化活動の場として各自治会の会館、ふれあい会館、中央信用金庫2階があります。そして新たに1998年、私たち地域住民の醸金と桂坂にゆかりのある企業の協力を得て、桂坂自治会館が建設されました。この会館は、自治活動・文化活動・防災の拠点としてその意義は大きいものがあります。

会館竣工式の成瀬洛西支所長の祝辞を抜粋してみます。

桂坂学区の皆さま方は、自治会ならびに自治連合会に結集され、今日まで、ふれあい統一クリーンデーの取組みなどによる美しく清潔な環境のまちづくりをはじめ、統一夏まつりや体育祭、音楽祭など多彩な活動による学区民相互のふれあいと交流の促進、地域福祉の向上に努力されるとともに、消防分団の創設など地域の防火・防災力の向上にも力を尽くされるなど、潤いのある、安心して暮らせる故郷・桂坂の実現に、なみなみならぬ努力を続けて来られました。

皆さま方のこれらの幅広く多彩な活動とご努力は、市民1人1人が心豊かに地域で生活することができるよう、京都市が全力を挙げて進めております「光輝く元気なまち・京都」の実現に大きく寄与されるものであり、誠に心強く改めて感謝を申し上げる次第であります。

折しも、本年（1998）は、京都市の自治100周年の記念の年であります。

この記念の年に、桂坂学区の自治活動、地域活動の拠点となる施設が竣工いたしましたことは学区民の皆様の自治意識の高揚に大きな契機となるものであり、誠に意義深く今後の皆様方の地域づくりと地域コミュニティの強化、自治の発展に大きな役割を果たすものとなりますようお願いいたしております。

「学校コミュニティプラザ構想」

この会館が、自治活動、文化活動の拠点として今後活用されることとなりますが、昨年、桂坂小学校に「ふれあいサロン」も開設されました。

榎本市長が教育長の任にあった1993（平成5）年7月、「学校コミュニティプラザ構想田辺試案」なるものが発表されました。

その趣旨はこうです。今日は「あらゆる世代の市民が、自分の住むまちを誇りに思い、いつまでも住み続けたいと願うような地域社会をつくっていく」ことが求められている。そこで「文化活動、スポーツ活動、ボランティア活動の場として地域にある小・中学校の施設を整備して、地域に住む人々に開放する『学校コミュニティプラザ事業』を

計画してい」る。つまり、「学校を市民の生涯学習・地域コミュニティ活動の場として活用することで、地域のコミュニティネットワークを新たに形成し、地域社会の再生と発展を図り、21世紀に向けて、〈人が主役の健康都市づくり〉を目指」すというものです。

「学校ふれあいサロン事業」

そして、自治100年を迎えた1998年、「学校ふれあいサロン事業」としてその計画が具体化されました。

「ふれあいサロン」は、「地域に根差した自治活動のシンボリックな記念事業」として、学校の教室を1室、改修整備し、地域の「子どもたちからお年寄りまであらゆる世代の市民」が「集い、学びあえる身近な生涯学習の場として開放される」こととなります。

1999年の9月19日に開設された桂坂小学校の「ふれあいサロン」も、かつての「町衆の英知とあふれる熱意」を今に甦らせ「〈元気な京都〉の基礎となる〈元気な地域〉を創設」する（市長のこぼ）拠点となるべきところです。

街中の過疎化を迎えたところとは異なり、桂坂は人口増加の著しい地域です。桂坂小学校はこれまで、ゆったりとした羨ましい学習と遊びの空間を誇っていましたが、いまや特別教室に間仕切をして普通教室に模様替えせざるをえない有様です。こうした状況下での「ふれあいサロン」の開設ですから、今は利用上の制約・窮屈さはやむをえないことかも知れません。



「ふれあいサロン」はこうした状況の中での地域への開放事業ですが、利用面での窮屈さはやむを得ません。

利用時間帯は、午前9：00～12：00、午後13：30～16：30

「ふれあいサロンの開設」
みんなで元気な地域社会を
ミーティングルームを改装 文化活動の場に
9月19日、桂坂小学校の「ふれあいサロンの開所式」が関係者出席のもとで行われました。
学校の施設を活用し「子どもたちからお年寄りまであらゆる世代の市民の皆が集い、学びあえる身近な生涯学習の場」として地域に開放されるものです。

夜間：18：00～21：00
但し、学校教育活動の間は、学校の利用が優先です。
利用資格は、管理運営委員会に加盟する各種団体と委員会に登録したサークルです。
管理は小学校の教頭で333-11101
申込時に利用時間に応じた実費を取ります。
これで、自治活動と防災の業務上の拠点である桂坂自治会館と併せて、二つの貴重な地域の文化活動の場が揃ったこととなります。

「町衆」の英知を活かして

こうして新たな器がまた1つ出来ました。私たちとしてはここで、かつての「町衆」よろしく「英知とあふれる熱意」を今に甦らせながら、生涯学習やボランティア活動、そして桂坂の文化創造などの大切な拠点としてこの施設を存分に活用していく必要があるでしょう。

桂坂自治会館の維持管理

会館は、自治連合会の役員が2名、使用の申込の受付とその維持管理を担当しています。

そのほかに会館使用の各団体が、4月を担当する自治連合会本部から3月の広報編集部まで毎月交替で会館の清掃に当たっています。

会館の印刷機

桂坂自治会館の1階に簡便な印刷機が設置されました。多くの学校で使用されている「優れもの」で、2000年3月より各自治会、各種団体が総会の議案書などの印刷に使用しています。

かつて広報『桂坂』7号の「談話室」(1993.12.26)で編集部が「印刷室」を望んで次のように述べています。

1つの組織の大切な伝達手段である「広報紙」は、文選・レイアウトまではワープロで何とかできますが、大量の印刷となるとままなりません。自らの手で継続的に発行する場合、この「印刷」面がネックになりそうです。

各区の「相談室」が「地域振興室」と名を大きく変えました。小さな「文化事業」ともいえる広報紙の継続的発行を保証するような簡便な「印刷」設備が各区に備わり、自由に使えたならば、「田邊試案」の意に沿うて「地域振興」も実あるものになるのではないのでしょうか。恰好の「印刷室」を望みたいところです。

印刷機は「文化事業」の推進・発展、「地域振興」などに大きく寄与する利器です。この機器がこの度、私たちの自治会館に備えられました。今後はこの「印刷室」で、会議のレジュメの印刷にとどまらず、多彩な表現・広報活動に活用されて、桂坂の「文化振興」のために大いに役立つことでしょう。

不特定多数の人が共用します。この機器は共用に耐え、トラブルの少ない機種ですが、私たちは扱い方を熟知して有効に、そして大切に使用していきたいものです。

